

語り手 山口忠光さん  
(明治40年生まれ)  
昭和63年8月22日収録

ありふれ

昔、日本一の大嘘つきが、日本国中どこへ行って嘘をつくにもつくことがない。「支那の国へ行って支那の嘘つきと競争して、どっちが強いかわってみたる」  
嘘つきが支那を端から歩いて行って「おれは日本一の大嘘つきだが、支那の大嘘つきはおるだろうか。会いたいもんだ」って、聞いて行きよったら、支那の大嘘つきの家へ聞き当てて、行ったら娘が一人おった。  
「おまえの方は支那一番の大嘘つきだぞうだ

## 日本一の大嘘つきと中国一の大嘘つき

(東伯郡三朝町大谷)



イラスト・福本隆男

## 「法螺吹き童児」に相当

一本持つてつぱりしに「お母さんは」  
行った「お母さんは」  
「日本の琵琶湖が破れてかなわんで、木綿針持つて縫いに行った」って。  
「こりゃあ、おれより上手だ。負けちゃあいつた。」  
「それじゃあそれを捜かけて行って、頭が禿になあれ」って。  
「よし、おれがぼっか来たんだか」と娘に聞か来たんだか「と娘に聞か来たんだか」  
「こんなばかたれっ。日本の嘘つきのやつ刺したろうと思つのに、と

「お父つあんは日本大風吹きでうちの裏の千れやれ、きょうとや(恐いたる)」とお父さんは飛んで出た。  
「それじゃあそれを捜かけて行って、頭が禿になあれ」って。  
「よし、おれがぼっか来たんだか」と娘に聞か来たんだか「と娘に聞か来たんだか」  
「こんなばかたれっ。日本の嘘つきのやつ刺したろうと思つのに、と

その後へお母さんがもどってきた。「お父さんはどがした」「日本一の大嘘つきの後を追うて行った。お母さんはお父さんが負けたらいけんけえ、髪剃ってあげるけえ、一生懸命仏さんを拝みなさい」とお母さんの髪を

解説

各地で類話はよく語られていた。関敬吾『日本昔話大成』では、笑話の「巧智譚」

「業較べ」の中の「仁王と賀王」とか、「法螺吹き童児」というのがそれに相当するようである

「ありゃお母さんが、内容的には後者の方だ」「何であがんに近いか」と思われる。

「お父さんが」  
「元鳥取短期大学教授」  
(水曜日に掲載)